

奈良時代に先鞭をつけた持統天皇

「あかねさす紫野ゆき標野ゆき野守が見ずや君が袖振る」、今から約1300年前、近江の蒲生野で天智天皇が催した薬草狩りのあと、宴の席で額田王が詠んだ歌である。

かつての恋人・大海人皇子が額田王に向って袖を振っている、「野守が見ているではありませんか。（もう私は貴方の想いびとではありませんよ。お止めになって）」

このとき、**鸕野讃良**（後の持統天皇）は13才で叔父・大海人皇子に嫁いでおり、父・**中大兄皇子**（後の天智天皇）は、鸕野讃良だけでなく、大田皇女、大江皇女、新田部皇女ら4人の娘を弟・大海人皇子に嫁がせていた。中大兄皇子は、政権を維持するため、弟・大海人皇子の協力が不可欠であったが、また、弟の恋人・額田王を横取りするために娘4人を与えた（という説がある）。

天智天皇は、自らの息子・大友皇子を次期天皇にしたいと考えており、これを察知し身の危険を感じた大海人皇子（天武天皇）は皇太子を辞して吉野に隠棲する。鸕野讃良も随従し逆境にある皇子を支えた。

天智天皇が崩御し、近江朝廷は大友皇子を即位せるとともに大海人皇子を滅ぼす準備する気配を見せた。そして古代史最大の内乱・**壬申の乱**が始まるのであるが、鸕野讃良は乱の間も大海人皇子を支え続けたという。

大海人皇子が勝利し天武天皇朝が成立すると、鸕野讃良は皇后に立てられ、天武が遂行する施策を支えた。特に後世、天武朝が推し進めたとされる飛鳥浄御原令の制定と藤原京の造営は、天武が崩御したのちに彼女が継続して完成させた。また、日本史最初の正史「日本書紀」も**持統天皇**時代にその緒につき孫娘・元正天皇時代に完成した。

天武在命中に、長子・高市皇子や亡き姉・大迫皇女の遺児・大津皇子を差し置いて我子・草壁皇子を幼少にも拘わらず強引に皇太子に立てた。

大津皇子は、草壁皇子に比べ、資質・才能に恵まれた強力なライバルであったため、天武天皇が崩御した翌日には謀反の罪をきせて殺してしまう。

こうして息子の天皇就任を願ってやまない鸕野讃良であったが、草壁皇子はあっけなく薨去してしまう。孫の軽皇子は幼く皇太子に立てることも憚られ、自ら天皇に就き孫の成長を待つことにした。**持統天皇**の誕生であり、後世「天武・持統」と称せられる治世が実現する。孫・文武天皇就任と続き、持統は上皇として自らの系統を支える。

日本史上に現れる女帝が「傀儡、お飾り」的で自らが政治を行なった例がなく、持統天皇が唯一だったとは後世研究者の一致するところである。

天智天皇・持統天皇の父娘の二人が詠み百人一首にも収録されている歌を以下に記す。

天智：「秋の田の刈り穂の庵の苦をあらみ我が衣手は露に濡れつつ」

持統：「春過ぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天香具山」